

濟定檢省部文

師範學校
日本文法教科書
下卷

著 山田孝雄

東京
寶文館藏版

教科書文庫

4

815

51-1926

2000301924

42673

教科書文庫

4

815

51-1926

200030
1924

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

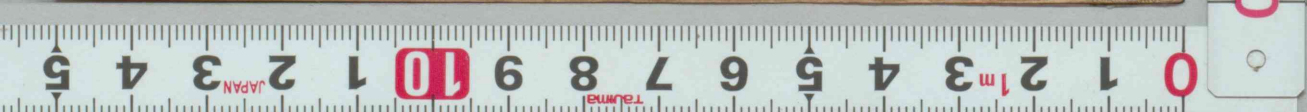
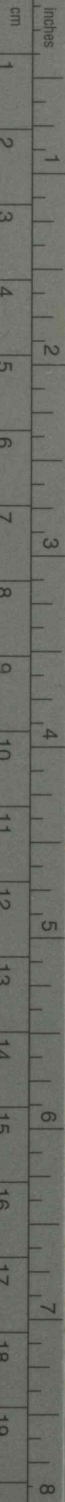


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

3759
Y213

教科書文庫
4
815
51-1926
2000301924

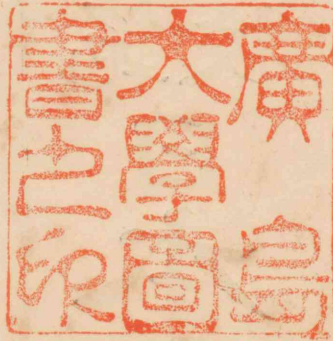
日一月四年五十正大
濟定檢省部文

山田孝雄著

師範學校
日本文法教科書

東京寶文館藏版

広島大学図書
2000301924

例言

一、本書は師範學校の文法教科書に充てむがために編纂したるものなり。

一、本書は文法全般に亘り、平易簡明を旨として記述したるものなり。ことに従來の注入教授、器械的記憶の弊を一掃せむがため、多くの文例より推して文法上の法則を發見せしめ、或は生徒をして種々の表を作製せしむるなど、一に開發的、歸納的に叙述したり。

一、本書の練習問題は質及び量に於て、精選を施し以て正確なる知識の收得を期したり。

大正十四年十月

| | | |
|-----|------------------|----|
| 第二章 | 文の成分…………… | 四六 |
| 第三章 | 文の成分の排列及び省略…………… | 六三 |
| 第四章 | 節…………… | 六八 |
| 第五章 | 文の構造上の分類…………… | 七二 |
| 第六章 | 文の性質上の分類…………… | 七六 |

師範
學校
日本文法教科書 下巻目次終



師範
學校
日本文法教科書 下巻

單語篇

第九章 助詞

〔三〇〕 梅の花。

我は汝を愛す。

風吹かば波立たむ。

右の文例において「は」「を」「ば」は何れも上なる語につきて

これを助けて他の語との關係をあらはすに用ゐらる。かくの如き單語を助詞といふ。

〔六〕 助詞は二以上重ねて用ゐることも少からず。

わが日本を櫻花國とは言ひ得て切なるかな。

皇御國の武夫は如何なる事をかつとむべき。

〔六〕 助詞はその數多く用方もそれと異なり。今次に用方の特に注意すべきものに就きて述べむ。

(一)「に」

東京に博覽會を開く。

東京へ行く筈なり。

右の文例の如く「に」は場所を示し「へ」は方向を示す助詞

なり。然るに口語にてはこの區別曖昧になれり。

(二)「ば」

愛なくば何の處にか社交の愉快あらむ。

過を改むるに自ら過てりと思ひつかばそれにてよし。

し。

水至りて清ければ魚住まず。

傍への孤つ松に近寄れば鳴驚きて飛ぶ。

右の文例の如く「ば」には二の用方あり。即ち用言の未然形に屬して未定まらぬ事を條件として示す時と、已然形につきて已に定まれる事を條件として示す時とありて、その意義を異にす。

その事をば棄てて一步踏出すべし。

右の文例の「ば」は本來「は」なるが、「を」の下につく時に濁音となるものにして、上にいへる「ば」とは異なるものなり。

(三)「とも」

たとひ屍を戦場に曝すとも名を後代に傳へむ。

誠篤ければ當時知る人なくとも後世必ず知己ある者なり。

右の文例の如く「とも」は動詞の終止形、形容詞の未然形につきて假定の條件をあらはすに用ゐらる。但現代文に於ては往々動詞、助動詞の連體形につきて例へば「數百年を経るとも」「如何に批評せらるゝとも」のやうに

誤り用ゐることあり。

(四)「ど」

近き舟は行けど遠き舟は動かむともせず。

本日天氣清朗なれども波高し。

右の文例の如く「ど」は用言の已然形につきて既定の條件をあらはすに用ゐらる。

(五)「や」「か」

わが思ふ人はありやなしや。

こはよく似たるにあらずや。

汝は物に狂ひてかくはいふか。

まことにその人か。

右の文例の如く「や」「か」はともに疑問の意味をあらはす助詞にして、「や」は用言の終止形につき、「か」は體言と用言の連體形とにつく。但現代文に於ては「や」は往々連體形につけて用ゐることあり。

上に疑問の語「たれ」「何」「幾何」等のあるときは「か」を以てその下を受くる慣例なれども、現代文に於ては往々「や」を用ゐることあり。例へば「幾何なりや」「如何すべきや」の如し。

「や」「か」は疑問の外に反語の用方あり。例へば
その時悔ゆとも甲斐あらむや。
かくてやはあるべき。

いかでか遠く遊ばるべき。
何かは苦しからむ。
の如し。これらは表面に疑ひて内實は強く主張するものなり。又別に感動の意義をあらはす「や」あり。
あな面白の春雨や。

(六) な な …… そ

人に語るな。
汝あやまちすな。
いたくななきそ。
物思ふ我に聲なきかせそ。

右の文例の如く「な」は動詞の終止形につきて禁止の意

「なそ」の格

をあらはし「な」そは相呼應して禁止の意をあらはす。
この時「そ」は動詞の連用形につく。

(七)「し」

はるゝゝ來ぬる旅をしぞ思ふ。
今日しも都につきぬ。

右の文例の如く「し」は強く指す意義をあらはすために用ゐらる。

(八)「ばや」「なむ」

早く都に行かばや。
心あらむ人に見せばや。
苦しき冬は早く過ぎなむ。

鳥も啼かなむ。

右の文例の如く「ばや」「なむ」は動詞の未然形をうけてともに願望の意をあらはせり。連用形につく「なむ」は助動詞「ぬ」の未然形「な」に助動詞「む」の結びつきたるものにて願望の助詞「なむ」と形同じき爲誤り易ければ注意すべし。

(九)「かな」「を」「をや」「よ」

今にして思へば夢の如きかな。
昨日今日とは思はざりしを。
況んや一人は譽め、一人は毀るをや。
壽永の末の頃かとよ。

たよりなき心細さよ。

右の文例の如く「かな」「を」「をや」「よ」は感動の意をあらはしたるものなり。

練習

一、次の文章中より助詞を抜き出してその用方を考へよ。

(1) その意氣のいかに猛烈なりしかを見よ。

(2) いかにも隠すとも詮なからむ。

(3) 兄弟とこそいへ、彼等の性質は雪と炭とのごとく、甚だしく相違せるぞよ。

(4) かの聲は庄助にあらずや、何事を申すにや。

(5) 一人も残らず討取つて年來の仇に報い、此度の賞に預らばや。

(6) 人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に惑ひぬるかな。

(7) 太平の世にすら然り。いはんや亂世に於てをや。

(8) 我は親同胞ともに今は故郷にあらねどなほ故郷こそこひしけれ。

(9) ふみ分けよ、倭にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは。

(10) 我が嬉戯せし幼時の樂しき記憶をおもひ起せば、木石亦知友の感なくんばあらず。

(11) 葉武者どもには目なかけそ。

(12) 我さきき心の中にて與へんと思ひ定められたれば、其の八死したりとも初の志を變ふべきにあらず。

二次の文章に誤あらば正せ。

(1) 若し明日雨降れども彼は歸國すべし。

(2) 明日雨天に候へば延期いたすべき筈に候。

(3) いつ御出立なさるゝや。

(4) 卑怯なる振舞して敵に笑はるるな。

(5) 刀折れ、矢つくとともに、いかで屈すべき。

(6) 都合あしとも約束をば違へじ。

(7) 富士山は果して日本第一の高山なるや。

(8) この事はいかに處理して可なるべきや。

9) こゝに塵捨つるな。

(10) 或は不行届の儀これあり候へども御免下されべく候。

第十章 單語の轉成

(一) イ 偉業燦然として光りかがやけり。

(ロ) 偉勳の光り國史の古今を照せり。

(ハ) あはれ勇ましき振舞かな。

(ニ) きく人何れもあはれを催せり。

右の文例において(イ)の「光り」は本來の動詞たる用をなせり。然るに(ロ)の「光り」は名詞となれり。(ハ)の「あはれ」は本來の感

動詞にして(三)の「あはれ」は名詞となれり。かくの如く成立せる單語が用法によりて他の品詞に變化するを單語の轉成といふ。

單語の轉成には次の四種あり。

(一)轉成の名詞。

| | | |
|-----|-----|-----|
| ひかり | かすみ | こほり |
| おび | あふぎ | のし |
| さし | ながめ | かぎり |
| あか | あを | しろ |
| たか | やど | うた |

等は何れも動詞の運用形より名詞に轉成せるもの。

等は用言の語幹より名詞に轉成せるもの。

きく人いづれもあはれを催せり。

のあはれは感動詞がそのまま名詞に轉成せるものなり。

(二)轉成の形容詞

| | | |
|-----|-----|-----|
| 大人し | 功勞し | 黄色い |
|-----|-----|-----|

等は體言より形容詞に轉成せるもの。

甚し はるけし のどけし

等は副詞より形容詞に轉成せるもの。

いさまし なつかし さわがし

等は動詞より形容詞に轉成せるものなり。

(三) 轉成の動詞

くび(頸)る また(股)ぐ

れうる(料理)

さうぞく(装束)

等は體言或は漢語より動詞に轉成せるものなり。

(四) 轉成の副詞

みだりに 頻りに ならびに

等は動詞より副詞に轉成せるもの。

しづしづと歩みいでさせ給ふ。

はやばやと御見舞下され候段御禮申上候。

の「しづしづ」はやばやの如く形容詞より副詞に轉成せ

るものなり。

練習

次の文中より轉成したる語を抜き出し、その如何なる語より轉成したるかを考へよ。

(1) 謠ひをうたひ、舞ひをまふ。

(2) あか、あを、しろの繪具にてうつくしき草花を描きぬ。

(3) 遠山はかすみの中にありて夢の如し。

(4) なつかしき故郷に歸りて昔の友と語りなどしき。

(5) のどけき春の日野邊に遊ぶ。

(6) 實ににがにがしき事なり。

(7)なれなれしき様子にて語り合ひぬ。

(8)眺もはるけき大海原。

(9)彼僅かに読み書きの心得あるのみ。

(10)まことにいさましきことといふべし。

〔六〕

あはれさに堪へずして袖をしぼりぬ。

こは實にたやすき事なり。

あられたばしるなすのしの原。

右の文例において「さ」は感動詞「あはれ」の下につきてこれを名詞となし、「た」は「やすき」「はしる」の上につきてこれらの語に力を添ふるに用ゐらる。かかる「さ」「た」等は一定の意味は

あれど單獨にては文中に用ゐらるるものにあらず。かくの如きものを接辭といふ。

接辭には「た」の如く語の上のみおかるゝものと、「さ」の如く語の下のみおかるゝものとの二種あり。一を接頭辭といひ、一を接尾辭といふ。例へば

| | | | |
|------|------|------|------|
| み空 | こ山 | こぎれい | こ躍る |
| さ夜 | さ渡る | か弱し | たやすし |
| たなびく | け壓さる | み位 | み衣 |
| お早い | ま夜中 | ま暗 | きまじめ |
| す面 | を川 | | |

等は接頭辭なり。

| | | | | |
|------|------|-----|----|----|
| 深み | 厚み | 悲しさ | 寒け | 眠け |
| 大人げ | うれしげ | 少女ら | 汝ら | |
| 子供たち | 親たち | | | |
| 一つめ | ふつか | みか | | |

等は接尾辭なり。

〔三〕 接尾辭には體言、用言、副詞又はそれらの語幹につきて他の品詞に轉成せしむるものあり。例へば

| | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|
| 深み | 高み | 重み | 青み | 白み |
| 遠さ | 悲しさ | 逢ふさ | 行くさ | |
| かへるさ | 大膽さ | 寒け | 眠け | 大人げ |

等は何れも接尾辭つきて名詞に轉成せるものなり。

| | | |
|------|-------|-------|
| 男らし | 子供らし | 學者らし |
| 露けし | 議論がまし | 勝手がまし |
| 古めかし | 商人めかし | |

等は何れも接尾辭つきて形容詞に轉成せるものなり。

| | | | |
|-------|-------|------|------|
| 春めく | 時めく | 上手めく | |
| 學者めかす | 我物めかす | 黄ばむ | 氣色ばむ |
| 音なふ | 罪なふ | 大人ぶ | 鄙ぶ |
| をかしかる | 寒がる | 痛がる | |
| 學者ぶる | 賢人ぶる | 上品ぶる | |

等は何れも接尾辭つきて動詞に轉成せるものなり。

| | |
|------|------|
| うれしげ | 心地よげ |
|------|------|

花やか

まめやか

等は接尾辭つきて副詞に轉成せるものなり。

練習

次の文につきて接辭の如何に用ゐられてあるかを語れ。

- (1) 木々の梢もはや黄ばみたり。
- (2) 笥の雫ならではつゆ音なふものなし。
- (3) 鳥の聲などもことの外に春めき渡りぬ。
- (4) 學者ぶりたりとて實才なくば何をかしいでむ。
- (5) さ夜ふけてほの暗き燈の影ものさびし。
- (6) 人らしく振舞へ。男らしく憤發せよ。

- (7) その状は種々にしてみやびたるもひなびたるもみゆ。
- (8) 吾らの友だちに河口といふ姓の人三人ほどあり。
- (9) 心地よげに笑はせたまふ。
- (10) 或は捲取られ或は所要の大きさに斷截せらるる其の早さ目を驚かすばかりなり。

第十一章 單語の複合

〔三〕 磯城島の大和心を人とはば朝日に匂ふ山櫻花。

年々歳々花相似たり歳々年々人同じからず。

右の文例において「磯城島」「大和心」「朝日」「山櫻花」「年々」「歳々」相似るの如きは二以上の單語の複合にして、しかも一つの觀

念をあらはせり。單語の複合には「年々」「歳々」の如く同じ語を重ぬることあり。又「磯城島」「大和心」の如く異なる語を合せたるあり。甲を疊語といひ、乙を熟語といふ。

〔三〕 人々たえずとぶらひにく。

われわれ一同の感謝する所なり。

行くくのみくふ。

よしよし目にものみせてくれむ。

なほなほ御攝生專一と奉存候。

あはれあはれ悲しき事かな。

右の文例の如く疊語は、體言、用言、副詞、感動詞等にあらはるるなり。而、助詞は決して疊語となることなし。

〔六〕 疊語はその意義よりいへば種々の用をなす。先にあげし「人々」「我々」の如く多數なるを示すものあり。又「一々」「年々」「歳々」「行く行く」「よしよし」「はやばや」「しづしづ」の如く副詞となれるあり。又「なほなほ」「あはれあはれ」の如く意味を強むるに止まるもあり。

〔充〕 熟語はその意義よりいへば二様あり。一は「草木」(植物)「忠孝」(主たる道德)「父母」(親)「山水」(風景)等にして括弧内に示せる如き新しき意義を生ずるものにして、一は「山櫻」「櫻山」「花櫻」「櫻花」等の如く下にある語が主にして上なる語はその意義を限定するものなり。即ち「山櫻」といへば櫻の一種にして「櫻山」といへば櫻のある山をさす。又「花櫻」といへば花さけ

る櫻にして「櫻花」といへば櫻の木の花をさせるが如し。

〔七〕 ひとびと きぎ(木々) それぞれ

はなばなし とりどり ひとつびとつ

やまざくら さくらばな

ものがたる みぐるし

かくの如く疊語熟語をつくるために、下の語の頭の音の濁ることあり。これを連濁音といふ。

〔七〕 かざぐるま(風車) ひやみづ(冷水)

つまづく(爪突く) まばゆし(目映し)

の如く熟語となるが爲に上なる語の末の音がまま轉ずることあり。かくの如きを轉音といふ。

練習

次の文中より疊語と熟語とを抜き出せ。

(1) 家々皆國旗をあげて歡迎の意を表せり。

(2) 實るほど頭のさがる稻穂かな。

(3) 薄暗き室に籠りて研究に餘念なし。

(4) 湊は遠淺になりて船をとむるに便ならず。

(5) 高く茂りたる木々空を蔽ひて日光も漏れ來らず。

(6) 君臣父子夫婦長幼禮にあらざれば行はれず。

(7) 落葉をふむ自分の足音ばかり高く時々あわただしく

飛去る山鳩の羽音に驚かされるばかり。

(8)十二月の末残る日數も數ふるばかりになれば、處々に年の市など立ちて人々は復新年を迎ふるに忙し。

第十二章 「あり」の結合せるもの

〔七〕ラ行變格活用の動詞「あり」は用法甚だ廣くして種々の語と結合して用ゐらるることあり。次にこれにつきて述べむ。

(一)形容詞の連用形例へば「善く」「悪しく」が「あり」と結びつきて「善くあり」「悪しくあり」とつづくものが「く」と「あ」と約りて「か」となり、「善かり」「悪しかり」となり、全くラ行變格活用と同じ活用をなす時あり。かかるものはそ

の形、動詞の如くなれども、その意味は形容詞に似たるをもつて特に形容動詞と名づくることあり。この詞は口語にては「よからう」「よかつた」といふ如き形のみを用ゐる。

(二)助詞に「と」と「あり」とが結びつき約りて「なり」「たり」となり、ラ行變格の如き活用をなす形あり。これは名詞、代名詞につけて用ゐらるゝ場合と副詞につけて用ゐらるゝ場合とあり。

正成は忠臣なり。

父は大藏大臣なり。

君君たり、臣臣たり。

右の文例において「なり」「たり」は名詞、代名詞又はこれと同じ取扱を受くるものにつきて、指し定むる意味をあらはしたるものにして、これを指定動詞といふ。而して指定の「たり」と時をあらはす助動詞「たり」とは形同じけれど、意異に、その連結も異なれば注意すべし。而、この「たり」「なり」は口語には用ゐず。

態度堂々たり。

辯舌滔々たり。

林靜なり。

室内明なり。

右の文例において「たり」「なり」は何れも「堂々と」「滔々

と」「靜に」「明に」の如く用ゐらるる副詞の「に」と「と」ありの結びつきて約りたるものなり。かゝる語もその形、動詞の如く、その意義、形容詞の如くなれば(一)の場合と同じく特に形容動詞と名づくることあり。而、口語には「たり」は用ゐず。「なり」の終止形となる「連體形」とは口語にては「な」といふ様になれり。

(三) 四段活用の動詞及びサ行三段活用動詞の連用形より「あり」につづくるものが約まりて

行けり。

なせり。

いへり。

段四

よめり。

せり。サ行三段

の如き形をなすことあり。これらは四段活用の已然形、サ行三段活用の未然形に「り」を添へたる如き形を呈せり。その意味はその作用の繼續存在せるものをあらはすものにして、今日にては終止形のみ用ゐらる。而、これは口語には用ゐず。又この形は四段及びサ行三段に限るものなるを往々下二段活用の動詞にも之を濫用して「受けり」「捨てり」「籠めり」などいふことは誤なり。

練習

一、次の文中より動詞ありと結びつきて約まりたる語を抜き出せ。

- (1) 東岸西岸の柳、遅速同じからず。
- (2) 寒からず暑からず、今は最好の時節。
- (3) 人の體温は三十七度内外なれば、大方それより高かるべからず、低かるべからず。
- (4) 時鳥鳴きつる方を眺むれば、唯有明の月ぞのこれる。
- (5) 君君たらずとも、臣臣たらざるべからず。
- (6) 祖父は石工にて家道豊ならざりき。
- (7) もし此事誠ならむには惜むべき事なり。

- (8) 忽ちにして百千筋の金光きらくとして八方に散じ
天地全く明なり。
- (9) 鮮なる答辯により初めて釋然たりき。
- (10) 予、東京に十年住めり。
- (11) 堂々たるその風姿、流暢なるその辯舌、聽衆をして恍惚
たらしむ。
- (12) 渠は容貌風采の點に於て已に衆に劣れり、才藻學藝の
點に於てもまた人に下れり。ただその人格の偉大な
るに至りては類を絶ち、群を超えてはるかに一頭地を
抽んづるものなり。

二次の文章を一つ一つの品詞に分ちてその品詞の名稱を

51。

- (1) 國を治むる本は、家を齊ふるにあり。
- (2) 通ふ汽船の笛の音も涼しく波にひゞくなり。
- (3) あゝ青年老い易く學成り難し。
- (4) 全軍の將士、休養すでに足りて、元氣鬱勃たり。
- (5) 町といへば町、しかし戸數は千にも足らない。
- (6) 山常に鳴動して地軸今にも碎けんかと思はる。
- (7) 人生れて二十より三十に至るまでは、方に出づる日の
如し。四十より六十に至るまでは、日中の日の如し。
盛徳大業この期にあり。
- (8) 父母や我を生み我を養ひ、我を長ぜしめ、我を教ふ。

(9)これ無上の厚恩、何の日か之を忘れん。
(10)賊軍再び勢をつくして金崎を攻む。義貞拒ぎ戦へども勝たず。

(11)御身等は常に林中または田畝の間にて彼等の舉動を觀察せしならむ。

三、國語讀本中の一課を各品詞に分解せよ。

四、次の文中より活用ある語を取り出してその種類及び活用語形の名をいへ。

(1)何事によらず、きまりよく順序を正して、亂雜に流れざるやうにすることは極めて大切なることなり。

(2)古の諺に「命あつての物種」といふがあり。味ある言葉

にあらずや。世の中に命ほど大切なるものはなし。

(3)志だに堅からば何事もなすべしと心得て可なりや。

(4)彼は貧困なりしかども、先輩の同情を得て成功せり。

(5)世の中にうれしきものは思ふどち花見てくらす心なりけり。

(6)園生の梅のおひ風に、我が住む里も春めきぬ。門田の雪も消えはてて若菜つむべく野はなりぬ。

(7)健康を保たむとせば先づ衛生を重んぜざるべからず。病は口より入ること多ければ衛生の第一歩は飲食物

(8)に注意することより始むべし。

(8)落葉のこぼれぬるに庭には夕日の影のどかにさした

- り。
- (9) 年來の宿望は今しも遂げたるに、いかにしてかこの大恩に報ゆべき。
- (10) 彈丸の飛び來る様、雨の降るに似たり。
- (11) 悔い改めよ、天國は近づけり。
- (12) 母の京都に行きたまひしは、いづれの時なりけむ、さだかには覺えず。
- (13) 女は心やさしく注意こまやかなるものなれば、看病のわざはもつとも適當せり。
- (14) 人に侮辱せられ、嘲笑せられなば、何人も不快の念を起して、腹立たしく思ふを禁じ得ざるべしと雖も、決して

- これに報ゆる所あるべからず。
- (15) 品位の高きも卑しきも、言語によりて直ちに推し測らるるものなれば、平常正しくして上品なる言語を用ゐ、方言又は下品なる言葉をさくべし。
- (16) 過をいさめかはして親むが、まことの友の心なるらむ。
- (17) 畫事も治道も一理にして二理はこれなく、畫道を以て治道に試み申すべしとあらんには、随分試み申すべく候。
- (18) 庭の芭蕉のいと高やかに延びて葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし。
- (19) ひぐらしは清らかな聲を立てて涼しさを増し、かつこ

うはのどかに鳴いてのんびりとした氣持を起させる。

(20)兄の子に家を譲らむ志、この時より起させたまへり。

五次の文章に誤あらば正せ。

(1)明日は友人を誘ふて旅行に出掛けやうと思ふ。

(2)助けたきは山々なれども悲しひかな力及ばず。

(3)苦しきことも恥ずることもすべて堪え忍むで仕事に

あたるふと思ふ。

(4)車を走らすもあり。馬に乗るもあり。

(5)一家をさそふる兄、突然死にたれば一家糊口にこまれ

り。

(6)井のはたの柳風になびきて枝長く垂れり。

(7)美しいひ花がおびただしふ咲きました。

(8)全體の捕捉し難き、盲者の象を撫すにも比すべし。

(9)糧道絶ふること久し、城兵殆ど飢ゆ。

(10)その孝心に感ずるもの多く金品を與えるもの少くな

かつた。

(11)類推することを得るものは時に之を略すことあり。

(12)國の滅ぶはその民の元氣の衰ふるに由る。

(13)生徒に一節讀まして、口語に譯さす。

(14)人をして見せしめしかど、既にあらざりき。

(15)はたと蹴りたる音して又靜寂にかへりぬ。

(16)いかに勉強するとも及第はできるまじ。

- (17) 彼がかく言ひ出せし折、予は直ちに反對を唱えり。
- (18) 去りたきものは去るべく、來たきものは來るべし。
- (19) 月霜の如く地に冴へ、風海の如く吼ふる夜は人籟すべ
- (20) 今更如何に悔ゆるとも致方なかるべし。
- (21) 彼壯麗なる住宅を建てり。
- (22) 年老ひて氣力大に衰へり。

文章篇

第一章 連語文

(一) 冴えたる月影。

遙に高し。

檢非違使等の武職。

爛漫と咲亂れた櫻の花。

讀みたる本。

右に示したるものは體言と體言とを連ね、體言と用言とを連ね、或は副詞と用言とを連ね、或は用言と助動詞とを連ね、

又その間に助詞を加へたりなどして夫れくの意味をあらはしたるものなり。これらは多くの單語を集めて一の連続したる語をなせども、未、完全に思想をあらはすものにあらず。かくの如きものを連語といふ。而して用言に助動詞の連結したる連語を特に活用連語と稱す。

〔五〕 月清し。

〔六〕 花咲く。

犬走る。

人歩む。

これらの例は單語の數も少く、形も短けれども、完全に思想をあらはしたるものなればただの連語にあらず。かくの

如きものを文といふ。

〔五〕 文を組立つるには體言を上におき用言を下におきて説明せしめざるべからず。而、助動詞、助詞、副詞、接續詞、感動詞等は之を助くるにすぎざるものなりと知るべし。

練習

次の各項が連語なるか、文なるかを判定せよ。

(1) 五月雨晴れたり。

(2) 日影まちえし草葉の色。

(3) 菅笠かぶりたる女。

(4) 石榴の花、火よりも赤し。

- (5) 孝は百行の本なり。
- (6) 淡路の島山をこむる春霞。

第二章 文の成分

〔五〕 主語、述語 文を組立つるには體言を上におき、用言を下におきて説明せしむるものなることは前述の如し。而その上にありて説明せらるる語は主語にして、主語に對して説明をなす用言をば述語といふ。主語と述語とは文の組立に必要な成分なり。

月いづ。 日は入りぬ。
風涼し。 雨降らむ。

これらの文の「月」「日」「風」「雨」は主語にして、「いづ」「入りぬ」「涼し」「降らむ」は述語なり。

〔五〕 主語の構成

(一) 主語は通常體言にて、これに助詞の伴なふことあり。

鳥飛ぶ。

月は清し。

(二) 主語は用言、活用連語の連體形に「こと」「もの」「ところ」の連続したる連語にて成ることあり。

來ること遅し。

遠きものは至らず。

得たるところ多かりき。

(三)主語は用言、活用連語の連體形にてなることあり。

かなたに見ゆるは鎮守の森なり。

遠きも來り會す。

過ぎたるは及ばざるが如し。

(四)主語はいくつも重ねることあり。

鯧鮓、鱒蟹は北海に産す。

遠き山、近き川、かなたの森、こなたの村、皆見えずな

りぬ。

(五)主語に次の如き特別のものあり。

兎は耳長し。

雪は色白し。

右の文例において「兎」「雪」は主語、「長し」「白し」は述語にして中間の「耳」「色」といふ語はその主語の何の點を述語が説明せるかを明にする爲に加へたる語にしてなほ主語の性質を有す。かくの如きを部分の主語といふ。

〔天〕 述語の構成

(一)述語は通常、用言、活用連語なり。

鶯なく。

川深からず。

(二)述語は體言に助詞「ぞ」「か」の結びつきてなれる連語よりなることあり。

彼は誰ぞ。

今著きたるは終列車か。

(三)述語が「なり」たり「たり」の指定動詞たる時は上に來る語と合せて一の述語とす。

日本軍は武勇なり。

父は縣會議員たり。

(四)述語はいくつも重ぬることあり。

苗は發育し、成長す。

この形は新しく、且珍し。

練習

次の文の主語と述語とを指示せよ。

(1)微雨あり、風も亦起る。

(2)君は何を學びたるか。

(3)こはまことに大事なり。

(4)汽車は昨夜東京驛を發し、今朝神戸につきたり。

(5)友は儕輩には敬せられ、また長上には愛せられたり。

(6)石炭は火力強し。

(7)金剛石は産出稀なり。

(8)かれとわが兄とは同じ年に生まれ、同じ學校に學びて、
今また同じく林業に従事せり。

(9)悲しむは愛するの至なり。

(10) 教ふるところは忠孝の道、文武の學藝なり。

〔五〕 補語

政府は貨幣を發行す。

彼は店員を戒む。

福澤諭吉は英語を研究せり。

右の例において、主語は完全に存在せり。しかれどもその用言のみにては思想を十分にあらはすこと能はざるなり。これらの例にてはその「發行せる品物」「その戒めらるゝ人物」その「研究せる事物」を補はざる時は十分に思想をあらはすこと能はず。この故に「貨幣」「店員」「英語」などを補はざるべか

らず。かくの如く用言の意義の不完全なるを補はむがために加へらるゝ語をば補語といふ。

〔六〕 補語の構成

(一) 補語は通常體言にてこれに「を」「に」「と」「を」して等を結びつく。

生徒作文を書く。

その面猿に似たり。

秀吉關白となる。

父はわれをして實業に就かしめんとす。

(二) 補語は用言、活用連語の連體形の下に「こと」「もの」「ところ」を連結してなれる連語にてなることあり。

われは足ることを知る。

事實は傳ふるところに違はず。

かれは飢ゑたるものをして食を得しむ。

(三)補語は、用言、活用連語の連體形にてなることあり。

われは足るを知る。

老いたるはわかきに扶けらる。

(四)補語はいくつも重ねることあり。

人をも身をもうらみざらまし。

われは父と花見に行きたり。

頼朝は範頼義經をして義仲と宗盛とを討たしめ

たり。

金剛石は鐵よりも水晶よりもかたし。

(八) 以上述べたる主語、述語、補語は文の組立に必要な成分にして、その一つにても闕くときは往々文の成立せざることあり。

練習

次の文について主語、述語、補語を指示せよ。

(1) 松籟は頻に琴音を弄して遠來の客を慰むべし。

(2) 兒どもは白き石と黒き石とを三つの箱と二つの袋とにわけ入れたり。

(3) 正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、ただこれ

を最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

(4)生徒は先生に書を讀み、文を作るを教へらる。

(5)駱駝はその性よく渴に堪ふ。

(6)われは友をして事情を彼に告げしめたり。

(7)勤勉なる人はわづらはしきを厭はず。

(8)愛憐の情うすきに似たり。

〔八三〕 修飾語

涼しき風吹く。

雨烈しく降りき。

彼は美しき繪をもてり。

右の文例において「涼しき」は主語「風」を修飾し、「烈しく」は述語「降りき」を修飾し、「美しき」は補語「繪」を修飾す。かくの如く文中のある語を形容修飾する語を修飾語といふ。

〔八三〕 修飾語の二種

涼しき風吹く。

荒れ狂ふ馬駈け來る。

波の音頗る喧し。

俄に吹き來る一陣の風。

彼は韋駄天の如く走る。

右の文例において「涼しき」「荒れ狂ふ」は體言なる「馬」「風」を修飾し、「頗る」「俄に」「韋駄天の如く」は用言なる「喧し」「吹く」「走る」を修飾す。

飾す。かくの如く修飾語には體言を修飾するものと用言を修飾するものとの二種あり。

〔四〕修飾語の構成

(一)體言に對する修飾語は用言及び活用連語の連體形にてなるものあり。

滔々たる雄辯は、列席せる判檢事及び竝み居る傍聽人に深き感動を與へたり。

(二)體言に對する修飾語は「が」「の」「より」などの助詞と連結せる體言または體言に準ずべき連語などにて成ることあり。

予が朋友は彼れの徒弟となれり。

これより北はロシヤに屬す。

英國よりの通信は佛國との交渉を悲觀せり。

席上にての相談はロシヤへの義捐金の事なりき。

(三)用言に對する修飾語は副詞にてなるものあり。

絶えずうち寄する浪、遂にさしも堅き巖を穿てり。

(四)用言に對する修飾語は助動詞「て」「助詞」に「と」「ばかり」

「まで」「だけ」「やら」「或は」としてなどに連結せる用言、活用連語及び體言またはこれらに準ずべき連語にてなることあり。

予愧ぢて答へざりき。

思ひ思ひに出でたつ。

彈丸雨霰と散る。

三年ばかり研究せり。

かれ來學期まで休まむ。

御入用なだけ差上げます。

雨が降るやらわからぬ。

一人として反對したるものなかりき。

(五) 用言に對する修飾語は「に於て」を以て「といふ連語を

伴ふ語よりなるものあり。

この點に於て双方の意見は反對せり。

會員は無記名投票を以て會長を選擧す。

(六) 動作の起る時間、位置などを示す修飾語は助詞「に」を

添へずして用ゐらるゝことあり。

明治三十八年五月二十八日(に)日本海_(に)の海戰あり。

今より後(に)はさる憂なからむ。

北方の海上(に)煤煙かすかに見ゆ。

(七) 修飾語はいくつも重ねることあり。

清く涼しき風そよ〜と海より吹く。

いと清く涼しき風そよ〜と南の海より吹く。

(八) 文の主語と之に屬する修飾語とを合せて主部と稱し、補語とこれの修飾語とを合せて補部と稱し、述語とこれらの修飾語とを合せて述部と稱す。

練習

- 一 次の文を成分に分解せよ。
- (1) わが軍優勢なる敵軍を破る。
- (2) 烏枯れたる枝に止れり。
- (3) 余は明日君を訪はむ。
- (4) 冬の夜の月はこの上もなく寒し。
- (5) 余は見すくよき機会を失へり。
- (6) 活潑なる精神は常に健康なる身體に宿る。
- (7) ボートの進水式は昨日隅田川に行はれたり。
- (8) 大臣は秘書官をして旨を委員に傳へしめぬ。
- (9) 春の夜の朧月は夢よりも淡し。

- (10) 新井白石は徳川時代の有名なる學者なり。
 - (11) 粟の穂のこを叩くなこの墓を。
 - (12) 天地開闢以來君臣の分定まれり。
- 二 次の文になるべく多くの修飾語を加へよ。
- 犬走る。 海見ゆ。 月明なり。

第三章 文の成分の排列及省略

(八) 文の成分の排列 文の成分の排べ方には一定の順序あり。次にその大要をあげむ。

(一) 主語は文の首位にあり。

鳥鳴く。

東京は世界の大都なり。

(二) 述語は文の末位にあり。

水清し。

義經平氏を討つ。

(三) 補語は述語の上、主語の下にあり。

農夫稻をかる。

勉強衆に超ゆ。

補語多くある時はその互の位置は上下一定の法則なし。

彼は身代をその子に譲りたり。

彼はその子に身代を譲りたり。

(四) 修飾語は通常修飾せらるゝ語の上にある。

父鉦萬の財産をその子に譲る。

我が心始めて平かなり。

蓮の花涼しげに咲き出づ。

(六七) 文の成分の倒置 主語、述語、補語の位置は時によりて倒置せらるゝことあり。これらは多く歌謠又は美文にあらはるゝものなり。

來れ、我友。

舞へや、人々。

誰か知らん、遠征の志を。

知るべし、松が民人の性情を感化するの極めて大なる

るを。

請ふ、賛成あらん事を。

〔八〕文の成分の省略 文の成分は漫に加除すべきものにあらずれども、文を簡潔にし語勢を強くするためにその中なるある成分の省略せらるゝことあり。

(一)主語の省略

(人々)出品に手を觸るべからず。

(余は)明日君を訪はむ。

(二)述語の省略

口は禍の門(なり)

千里の道も一步より(始まる)

(三)補語の省略

われひとりこれを斥けて(それを)然らずとす。

余は昨日彼を訪ひ今日も亦(彼を)訪へり。

練習

次の文の排列を常の順序に改め、且省略せられたる成分を補へ。

(1)乞ふ、これを歴史に見む。

(2)やよ正行、忘れたるか、父の遺訓を。

(3)人の悪をいふことなかれ。

(4)忘るなよ父母の恩を。

- (5) 知己なくば人生は荒野のみ、荆棘のみ。
- (6) 中に思あれば、外に色あらはる。
- (7) 痛快なるかな、言や。
- (8) たれかあはれと聞かざらん、あはれ血になくその聲を。
- (9) 空や海、海や空とも見えわかず、霞も波も立ちに立ちつ
つ。
- (10) 自ら謂ふ、交友の誼今古に愧づるなしと。

第四章 節

- (八五) 櫻咲く。 雪降る。
花散る。 蝶舞ふ。

月清し。

右の例はいづれも完全なる文なり。然るに今これらの文
が

櫻咲く頃は年中の好時節なり。

雪降れば、友來ず。

花の散るは、蝶の舞ふに似たり。

月清く、風涼し。

の如く用ゐらるゝ時は、文の一部分となりてその獨立を失
ふに至る。かくの如く文が獨立を失ひて他の文の一部
となれるものを節といふ。

〔五〕節は次の三種に大別す。

(一)修飾節 修飾語の如く用ゐらるゝ節をいふ。

櫻の咲く頃は年中の好時節なり。

月の明なる夜われは舟にて河を下りぬ。

櫻咲けば人來り遊ぶ。

雪降れば木毎に花ぞ咲きにける。

(二)名詞節 名詞の如く用ゐらるゝ節をいふ。

花の散るは蝶の舞ふに似たり。

成績の優等なるは特待生となる。

(三)對立節 下の文に對等なる關係を有する節をいふ。

鳥啼き、花笑ふ。

満は損を招き、謙は益を受く。

對立節に對し修飾節、名詞節を附屬節と稱することあり。

練習

次の文より節を抽出してその種類をいへ。

(1)夜の明くる頃、われは海上無事にかの地に著きぬ。

(2)時既に遅ければ汝行くともかひなからん。

(3)われは再び友を訪ひしに友は在らざりき。

(4)原告は條理井然と訴訟の理由を陳述せり。

(5)新聞紙は震災の甚だしかりしを報ぜり。

(6)わが始めてかれを知りしとき、かれは京都にありき。

- (7) 衆山は波濤の如く、大海は青壘を敷きたるが如し。
- (8) 霜は軍營に満ちて秋氣清し。
- (9) 四季の花常に絶えずして遊覽の車門前にならべり。
- (10) 旅館の燈火幽にして鷄鳴曉を催す。

第五章 文の構造上の分類

(九二) 文はその構造上より單文複文の二種に分つ。

(一) 單文 節を含まざる文をいふ。

社會は善惡正邪の戰場なり。

君の心事まことに悲しからずや。

今朝咲きたる朝顔は色美しかりき。

今や天下の士民漸く自省の志を立てんとす。

(二) 複文 節を含む文をいふ。

將軍年老いて元氣ますく盛なり。

雪降れば木毎に花ぞ咲きにける。

君子は人の己を知らざるを憂へず。

友は行の極めて正しき人なり。

雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ。

富は屋を潤し、徳は身を潤す。

山は峨々として、水は洋々たり。

人民定堵し、戸々蕃殖せり。

對立節を含む文を重文と稱することあり。

練習

次の文を構造上の種類に分ち、且成分に分解せよ。

- (1) 前方より人來ればわれ必ず左に避く。
- (2) 我は心おきなく田舎に轉養せん。
- (3) 舟中の客膽慄し心驚き安座する能はず。
- (4) 故郷は既にあれて新都は未だならず。
- (5) 平原こゝにつき、山勢突兀として天を支ふる壁の如く平原と直角をなして前方を塞ぐ。
- (6) よく勉強する人は後に必ず令名を揚ぐべし。
- (7) 姉の持てるは大きく、妹のもてるは小さし。

- (8) 雨風烈しく道は暗く、吾等は進退に窮せり。
- (9) 雪は野山をうづむれども老いたる馬ぞ道は知る。
- (10) 諺に勉強は幸福の母なりといへり。
- (11) 風雅の嗜あるものは、おのづから餘裕あり。
- (12) 元氣の恢弘せる今日の如きは、千古に互りていまだあらざる所なり。

(13) 外客の瀬戸内海を過ぐるもの風光の明媚なるを見て世界の遊園の稱の眞に空しからざるを知る。

(14) わが兵士は近年外國に於ける數度の戦争において人目を眩すべき武勇をあらはしたり。

(15) 飾少き座敷の床の間に投入の花一輪あざやかなるも

却つて雅致の深さを覺ゆ。

第六章 文の性質上の分類

(九二) 文を性質の上より分類して次の四種とす。

(一) 感動體の文 感動をあらはす文をいふ。

あゝげにも楽しき心よ。

あゝ山中の青葉のうつくしさよ。

面白の春雨や。

この種類の文は主語、述語の區別なく、多くは下に感動の助詞「よ」「や」等を伴ふ。

(二) 命令體の文 命令、希求、禁止をあらはす文をいふ。

人々これを誤ることなかれ。

火鉢にあたるな。

汝等急ぎて行け。

この種類の文はその述語は命令形又は禁止の助詞「な」を有するを以て一定の法則とす。命令體の文には往々主語を省くことあり。

(三) 疑問體の文 疑をあらはし、又は問を起す文をいふ。

君は兄弟ありや。

榮譽人望はこれを求むべきものか。

吾人は彼によりて何物をか得たる。

この種類の文にありては疑問の修飾語か、疑問の助

詞や「か」を有してその述語は「や」「か」「ぞ」にて終るか、又は連體形にて終止するを一定の法則とす。

(四)説明體の文 事物の説明をなす文をいふ。普通に最も多く用ゐらるゝ文はこの種のものなり。

松竹よく榮ゆ。

果肉は味甘く、香氣強し。

松の木の間に入影見ゆ。

この種類の文を結ぶにはその述語たる動詞、形容詞、活用連語の終止形を用ゐる。されど文中に「ぞ」または「なむ」といふ助詞を用ゐたる場合には用言、活用連語の連體形にて結ぶを法とす。

天下有數の清絶なる松原とぞ覺えし。

末の世には珍らかなる例にぞあるべき。

夕涼みよくぞ男に生れける。

梅の花なむ咲きたる。

また文中に「こそ」の助詞を用ゐたる場合には用言、活用連語の已然形にて結ぶを法とす。

御身は不可能の事をこそぞませたまへ。

人はかゝる境に立ちてこそはじめてその全能全力を發揮しうるものなれ。

われらは節操こそ大切なれ。

練習

次の文體を指定せよ。

- (1)これにて我を撻ち給へ。
- (2)何故に靜に養生し給はざるか。
- (3)延元の昔を思へば誰か涕泣なからんや。
- (4)その廉潔の心げに欽すべきにあらずや。
- (5)右の山隈に一ひら赤く咲き出でたる八汐の躑躅の美しさよ。
- (6)朝敵をほろぼし君を御代に即け參らせよ。
- (7)吾の下にも埋れぬ物とてはただ徒に名をのみぞ留めし。

(8)ひとり燈火の下に文をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むわざなれ。

(9)美なるかな、この佐渡が島の風情、凡そ眺めてかくもなつかしく、又況へん方なく心動かさるゝ景色は、之を他に求めて己は有りとも覺えず。

(10)己の欲せざるところは人に施すことなかれ。

以上國語文法の大要を説けり。今次に總練習のため問題を提出せむ。

(1)動詞活用の見分け方を述べよ。

(2)假名遣の誤り易き動詞の活用をいへ。

- (3) 動詞の活用形の用法を各段につき述べよ。
- (4) 動詞と形容詞との音便につきてのべよ。
- (5) 形容詞と口語につきてのべよ。
- (6) 動詞の口語につきてのべよ。
- (7) 助動詞及び助詞の連結につきて特に注意すべきものをあげよ。
- (8) 文の成分につき説明せよ。
- (9) 節とは何ぞ。
- (10) 文を構造上より分類して説明せよ。
- (11) 文を性質上より分類して説明せよ。
- (12) 「あり」の結合による用言を説明せよ。

- (13) 單語の複合につきて説明せよ。
- (14) 單語の種類をあげよ。
- (15) 文語と口語との文法上の著き差は何處にあるかを考へよ。

師範
學校

日本文法教科書 下巻終

大正十四年十一月三日印刷
大正十四年十一月六日發行

| | | |
|----|-------|-----------|
| 定 | 價 | 大正十四年臨時定價 |
| 上卷 | 金貳拾五錢 | 金四拾參錢 |
| 下卷 | 金貳拾四錢 | 金四拾壹錢 |



著者 山田 孝
發行者 大葉 久吉
印刷者 吉田 松次

東京市日本橋區本銀町三丁目拾四番地
東京市牛込區市谷加賀町一丁目拾貳地



會英秀社會式精 版刷印

發行所 關西專賣

東京市日本橋區本銀町三丁目
振替口座東京二八〇番
大阪市西區阿波堀通四丁目
振替口座大阪四三番

東京寶文館
株式會社 大阪寶文館

關西車賣
總行

東京口田大國三
大田口田大國三
東京口田大國三

大田賣文前
東京賣文前

| | | |
|---|------|---|
| 石 | 日本文天 | 石 |
| 石 | 日本文天 | 石 |

昭陽香
發售香
香消香

吉田甜木
大藥人吉
山田筆

大正十四年十一月六日發行
大正十四年十一月三日印刷

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大 | 正 | 十 | 四 | 年 | 十 | 一 | 月 | 六 | 日 |
| 大 | 正 | 十 | 四 | 年 | 十 | 一 | 月 | 三 | 日 |



広島大学図書

2000301924

